

<前回>：後期オリエンテーション

後期：自然神学の新しい可能性

1. 言語・解釈学から聖書へ
2. 聖書学の諸動向
3. 聖書学から政治思想へ

3-1：聖書と政治思想 3-2：アガンベン 1/21

Exkurs ・アガペーとエロス ・脳科学からキリスト教思想へ

<前回>聖書学と政治思想

(A) 聖書における政治思想の前提

(1) 契約思想

「神—人間（共同体・民族→個人）」の関係＝契約関係、人格関係における神（人格神）
人格とは何か？

1. 契約の構造：「約束—信頼」 → 責任性・違反への罰則・人格的な関係
我々はいかにして他人の言葉を信頼するのか？
2. 契約の起源・由来（創造論）と契約の結末・成就（終末論）

(2) 王国・王権とは

4. 支配とは、だれが支配者か：12部族連合から王政へ
多元的地方分権的システムと一元的中央集権的システム
5. 人間は自然の支配者か？ 創造論は人間中心主義？
6. 支配とは？
 - ・人間の固有の使命：「神の像」
エデンの園の管理者・園丁
 - ・古代イスラエルの王権→部族の利害の調停者 cf. オリエン트의専制君主
→調停としての支配
7. 王権は不可避的な必要悪か？ 王権の逸脱とそれでも支配者を求める人間

(3) 社会正義、経済と政治

8. 政治は、支配と問いと結び付くと共に、社会正義の問いにおいて具体化する。
政治は、経済として経済から区別されつつも、相互に密接な関連性を構築している。
「欲望」という問題。
 - ・近代キリスト教思想の前提→宗教の内面化・精神化＝私事化
聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法
本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。
しかし、献金とは、経済的な側面を有さないのか、聖職者は、実質的に職業化しているのではないか。建前論を超えられない、宗教の抽象的な議論。
 - ・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

↓

経済・富・欲望は社会正義に関連して、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この政治・経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など
まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

9. Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar (eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002.

(4) 聖書の宗教と経済との多様な関連性

10. 聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。

富者批判という基調と祝福としての富理解まで。



キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？

11. 富者批判：

12. 物質的な豊かさは神の祝福。→ 因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

13. 聖書における富の問題の多様性について。芦名定道、項目「富」（『キリスト教平和学事典』教文館、2009年）。

（B）新約聖書の国家理解

（1）旧約から新約へ

並木浩一「ヨブ記における契約——創造と救済」（『並木浩一著作集1 ヨブ記の全体像』日本キリスト教団出版局、2013年、260-271頁）

「筆者は契約を、神によって選ばれた民が歴史形成に参加する責任を自覚する源泉として理解する。この源泉は、それが枯渇して初めて民を愛する人々にその存在を気付かせる」（260-261）、「預言者たちは民のあり方の源泉を民族の創造期に求めた。その時に神と民との間に特別の関係が神の一方的な恵みによって樹立されたと確信した。民は神との交わりに招き入れられた。その関係をわれわれは契約と受け止める」（261）

「契約の民は武勇によってではなく、日常的に正義を行うあり方によって歴史を形成する。具体的に言えば、神の民にふさわしい社会は、人々が居住する町（実際には富裕層の発言力が強い王国時代の未熟な都市的共同体）で、社会正義を守る法的な自治によって維持される。イスラエルでは王権が各地域の司法権を掌握できなかった。それぞれの町は王国時代には司法権を持つ自治団体であった」（262）「ところが都市的精神が意味を持ち始めるべき時期、すなわち経済活動がようやく活発になった前八世紀に入ると、富者による都市支配が急速に進み、小農民は没落して自由民の権利を失った。それとともに自治と正義の精神は崩壊した」（262）、「すべての人々が申命記の民族観と祭司の指導体制を良しとしたわけではない」、「この時代にもなお、古い自律的な共同体における契約団体の伝統を大事にして兄弟盟約の精神に生きる道を捨てなかった少数の知識人がいた。彼らは祭司の指導を最小限度に押さえて、可能な限り市民の自律性を理念として保持しようと模索した人々である。ヨブ記作者はその一人であったと考えられる。」（264）、「ヨブは東方の異邦の民の一員として虚構的に想定されているにもかかわらず、神が樹立した彼との契約関係への固着は、彼がヤハウエ神とイスラエルとの関わりを知る信徒であることを物語る。」（265）

（2）新約聖書の国家論の射程

1. 単一の国家論を導き出すことはできない。しかし、新約聖書の諸文書には、政治経済的な問いが繰り返し現れている。

古代キリスト教：迫害から国教化へ、敵対から協調へ。

迫害（規模も期間も様々、棄教者の問題）

66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。 第1次ユダヤ戦争(66-70)

95頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。 第2次ユダヤ戦争(132-135)

249：デキウス帝の迫害 303：ディオクレティアヌス帝、キリスト教を迫害。

2. イエス：論争における国家への言及→多様な解釈が可能、政教分離？

<マルコ 12.13-17> 「デナリオン銀貨」「肖像」

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」

・ Richard A. Horsley, *Sociology and the Jesus Movement*, Continuum, 1989.

, *Jesus and Empire. The Kingdom of God and the New World Disorder*, Fortress, 2003.

Introduction: American Identity and a Depoliticized Jesus

1. Roman Imperialism: The New World Disorder

2. Resistance and Rebellion in Judea and Galilee

3. Toward a Relational Approach to Jesus

4. God's Judgment of the Roman Imperial Order

5. Covenantal Community and Cooperation

Epilogue: Christian Empire and American Empire

3. ヨハネ黙示録：迫害下の教会 → 国家との敵対関係

<ヨハネ黙示録 13～14>

15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもしないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。18 ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

- ・佐竹明『ヨハネの黙示録 上中下』（現代新約注解全書）、新教出版社、2007-2009年。
- ・田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004年。

第四章「終れない終末論」（243-320頁）

4. バーバラ・ロッシング (Barbara R. Rossing)

「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

in: Hessel / Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

- ・ロッシングの問題意識：黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」
- ・そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。
- ・ローマ帝国の「現実化した終末論」（永遠のローマ、ローマの平和）。

ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

- ・都市の女性的形姿（人格化）による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)

- ・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている」(209)、「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

- ・森林伐採、「裸の荒地」(17:16)

68-70年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。

ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。

- ・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」

「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」

- ・別の経済的ヴィジョン、新しいエルサレム（生命の都）は環境論的。
 - ・「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)
 - ・地上における神の家、都市生活のヴィジョン
地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。
- ・贈与的経済 (a gift economy)

生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダ

- ・メージを与えることへの預言者的な批判
- ・エゼキエルの新しい神殿のヴィジョンの拡張。
 都には神殿がない(21:22)。神の現臨は神殿に限定されない。全被造物に広がる。
 新しいエルサレムは人々を歓待する快適な都市
- ・諸民族の癒やし。創世記 3:22 の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。
- ・新しいエルサレムは未来のためのヴィジョンである。「わたしたちは、よりよい近隣、
 聖なる都を描きながら希望を持ち続けねばならない。」(219)

(3) パウロの共同体と経済

5. パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

<ローマ 13>

1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2 従って、権威に逆らう者は、神の定めを背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。5 だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。6 あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。7 すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

6. Richard A. Horsley, *Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All*, Westminster/John Knox Press, 2009.

Part 2: The Renewal of Covenantal Community

The Assemblies of Christ in the Letters of Paul

The movement, beyond Galilee

non-Judean (non-Israelite) people became interested and wanted to join. Paul and his coworker ... were soon establishing fledgling assemblies (*ekklesiai*) of Christ among non-Israelite in the cities of Greece.

the assemblies of Christ were communities with political-economic aspects inseparable from the religious aspect. (135)

Most significant economically, members of the assemblies of Christ were city dwellers, not peasants, and were slaves or artisans or underemployed wageworkers, not farmers in an agrarian village. (136)

New Testament scholarship has tended to construct a general synthetic picture of the "Hellenistic world" of the Greek cities in which the apostle Paul carried out his mission and early "Gentile Christianity" developed. (137)

ekklesia, assembly, a network of smaller household-based communities

a nascent alternative society that separated itself from the dominant imperial society as much as possible. (140)

Paul advocated all of this community discipline and solidarity in the conviction that "the appointed time has grown short ..., for the present form of this world is passing away" (1 Cor. 7:29-31). ...

By that he did not mean that the whole cosmos, including societal life, was coming to a catastrophic end. He meant rather that the days of the Roman imperial order were numbered, that "the rulers of this age ... are doomed to perish" (1 Cor. 2:6-8). (141)

There is no indication that any member of the assemblies of the Christ was from the extremely wealthy urban or provincial elite.

The picture in the book of Acts of a few well-off members is historically unreliable, certainly for the first generation or two. (142)

he understood the collection as the traditional economic reciprocity of villagers with one another. (144)

7. Richard A. Horsley, "Introduction," in, Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

These many indications in Paul's Letters shows that his gospel and mission stood sharply opposed to Caesar and the Roman imperial order, and not to the Jewish Law. Hence, Pauline scholarship needs to take a keen interest in understanding why and in what ways Roman power and the Roman imperial order impinged upon, and were objectionable to, Paul and the people among whom he worked. Because of the separation of religion and politics in modern Western NT scholarship, however, it has generally been assumed that such questions were irrelevant to our understanding of Paul and his Letters. Thus, the field is only beginning to investigate the conflictual relationship of Paul and the Roman imperial order.

This has been one of several interrelated areas of focus for the "Paul and Politics Group" of the Society of Biblical Literature, as exemplified in a number of contributions to a previous collection of articles. Accordingly, that group sponsored a session at the 2000 Annual Meeting on "Paul and the Roman Imperial Order," for which the papers by Efrain Agosto, Erik Heen, Jennifer Knust, and Abraham Smith were originally written. (5)

（４）パウロ論から（補足）

1. 水垣渉「思考者パウロとその高揚した語り——ローマ書8:38-39を中心にして、故泉治典氏の記念に」（思想とキリスト教研究会『途上』28、2013年、3-27頁）

・聖書神学：聖書の諸文書に内在する神学／聖書の諸文書の信仰・思想についての神学

↓

cf. 神学概念の多義性あるいは幅

思考者としてのパウロ、特にローマ書。

「非思考者パウロ」という神話。哲学的知恵への批判者（I コリント）

・修辞と論理：告白的文体、情意（情動性・情緒性）、

高揚体：相手を転向させるための文体（アウグスティヌス）

2. ヤーコブ・タウベス『パウロの政治神学』岩波書店、2010年。

(Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 2003.)

「ユダヤ人としてのわたしがパウロとどのような関係にあるかということ」

「哲学者としてのわたしがパウロとどのような関係にあるのかということ」(7)

「いまこそ諸学科・講座の間の風通しをよくすべきだという意見」(8)

「ユダヤ教の宗教史によっては、パウロはまだ本当に理解されてはいないのだということ」(12)

「ブーバー」『二つの信仰様式』「二つの信仰様式を区別」：ピスティスとエムーナー

「すなわち「・・・を信ずる」ということは、ギリシア的なものであるだけでは断じてないのであって、むしろメシアの論理の核心なのだ」(14)

「パウロの言葉は、途方もない仕方でも、ローマ人の考えとユダヤ人の考えとをまるごと顛倒させるものでした」、「いっさいの行ないよりも、この信仰の方が重要になったのです」、

「逆説的なものにこそメシアが集中的に見出されるということは、型に嵌まったギリシア精神ではなく、メシア的なものの論理に関わっています。」(20)

「このパウロの手紙は何が問題になっているのかを示すヒントが、この冒頭・末尾という

枠にすでにあるからです。冒頭にある前置きの形式がどれほど慣習的なものであろうと、パウロがそこに盛っている内容はまったく特殊です」(23)

「回心ではなく召命」「ユダヤ人から異邦人に遣わされた使徒として召命されている」(24)

「ローマは皇帝崇拜・皇帝宗教の中心地だったのでした」(25)

「ローマ書は、自ら創設したわけでない共同体に宛ててパウロは書いた唯一の手紙です」(28)

「いずれかの他の共同体ではなく、ローマ——世界帝国の中心地——の共同体に手紙を書き送ったというところに、もちろんパウロの政治的な天才が示されています。どこに権力を見出すべきか、どこに抵抗勢力を確立すべきかを嗅ぎ分ける感性が、パウロにはありました」、「パウロが地の果てまで行きたがったのは、そこで「採り集める」ためでした」(29)

「ローマの共同体宛てられたこの手紙が誰の手に渡ったか判らないにしても、監察官もバカでない以上、ほかでもないこのような前置きで始まる手紙が声に出して読み上げられたとすれば、これは政治的な宣戦布告にほかならない、ということです」

「ローマ書とは一つの政治的な神学である」(30)

「キリスト教文学は、隆盛を極めていた皇帝崇拜に対する抵抗文学だったということです」(31)

<ローマの信徒への手紙>

1:1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、—— 2 この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、3 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。5 わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。6 この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。—— 7 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

1:8 まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9 わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださるのですが、
・・・

13 兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。14 わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15 それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

8:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

15:30 兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、31 わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように、32 こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。33 平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。